
生と死と巫女と神

日向梨久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生と死と巫女と神

【Zコード】

Z6955B

【作者名】

日向梨久

【あらすじ】

艶やかな長い黒髪と漆黒の瞳を持つ巫女。彼女は生と死の均衡を保つ。

昔々、その昔。神社には巫女がひとり。黒い艶のある長い髪をひとつに結い、憂いを帯びた漆黒の瞳で参拝者の祈りに耳を傾ける。

ある日小さな少年が巫女に問つた。

『あのお社には何が居るの?』

巫女は答えた。

『神様が居られる。長い長い時を、あのお社の中で過ごされて居る』

『何の神様?』

少年はまた問うた。大きな瞳をキラキラと輝かせ、好奇心いっぱいの顔を巫女に見せながら。

『生と死を司る神様じゃ。この土地の生と死を、護つて居られる』少年には意味が解らなかつた様だ。小首を傾げ、不思議そうに巫女を見上げる。巫女はそんな少年の頭を撫で、にっこりと微笑んだ。『じきに解る。けれど、忘れてはならぬ。生と死は常に隣り合わせ。対になつておるのじや。だから…』

懐かしい夢を見た気がする。長い艶やかな黒髪と、憂いを帯びた漆黒の瞳。巫女は少年の頭を撫でる。優しく。

しかしこれは自分の記憶ではなかつた。幼い頃は海の近くに住んでいて、遊び場は常に砂浜。近くに神社らしき建物も無ければ、それらしき場所に行つた記憶もない。だから夢に出てくる少年は自分ではない。それに、古いのだ。映像が、雰囲気が、服装が。しかし。何故か懐かしさを覚えてしまうのだ。この夢は、俺が大学に通う為に実家から離れ、独り暮らしを始めた時からたまに見る

ようになつた。

夢を見た後は、決まって懐かしさと共に切なさが過る。

「やべっ」

時計を見ると、講義の時間が迫っていた。俺は慌てて準備を済ませると、愛車に乗り込み、エンジンを思い切り吹かした。

大学まではバイクで10分。所定の場所に駐車すると、講義室まで一直線に階段をかけ上つた。

りん。

バツと後ろを振り返る。確かに今、鈴の音が聞こえたと思ったのだが。聞き間違いだつたのだろうか。

そういう考えているうちに、講義開始のチャイムが鳴り出した。俺は滑り込む様にして講義室へと入つて行つた。

「んあー、肩凝つたあ」

首をぐるぐると回しながら、手をうなじへとあてる。滑り込みセーフだと思っていた講義が、既に教授は到着済みで、こつてりと居残り雑用を申し付けられたのだった。

今日は早く帰つて風呂でも入るか。辺りは既に暗くなつていた。バイクにキーを差し込み、エンジンをかける。かけたつもりだつた。

「あれ？」

何度キーを回しても、エンジンは奇怪な音を出してしまっては、ブスンという音と共に全く反応を示さなくなってしまった。

「エンストかよ、ついてねえ……」

こんな時間だ。今からではバイク屋もやつていのう。

俺は仕方無く徒歩で帰宅する事にした。愛車を置いて行くのはしおなかつたが、この際仕方がない。

溜め息を吐きつつ、歩き出した。普段歩いて通る事も無い道を、とぼとぼとゆづくとした調子で歩みを進める。

りん。

俺は辺りを見回した。また空耳だろうか。

りん。

また、だ。これは鈴の音に違いない。だが、何処から？

俺は注意深く辺りを見回した。いつもはバイクで直ぐに通り過ぎてしまうため、滅多にここら辺は通る事がない。

「あ

石段が見えた。外灯が丁度当たらない場所に、上へ上へと続く石段。

りん。

俺は何かに導かれる様に、その石段を一步一步踏みしめながら上がつて行った。

石段の上には鳥居があった。大きな鳥居。視界が黒に近い中、やはり鳥居は黒に見えた。

俺は鳥居を潜り、境内へと足を踏み入れた。

「 あ…」

不意に込み上げる懐かしさ。俺は此所に来たことがない。だが、来たことがある。そんな感覚に襲われた。

りん。

鈴の音が響く。目の前には社があつた。

「 生と死を司る神 ？」

ざわざわと周囲の木々が騒いだ。一陣の風が吹き、一瞬視界が塞がれた。

「 ツ…！」

長い艶やかな黒髪。憂いを帯びた漆黒の瞳。目を開けた俺の前に、女が立っていた。夢に見た、巫女だ。俺はそう確信した。

『 生と死は対になつておる 』

巫女が言った。不思議と、俺は冷静だつた。『あの時』もそうだつた気がする。

巫女は俺に歩み寄つた。

『 久しいな 』

巫女の言葉の意味は理解出来なかつたが、俺は確かに巫女に会つてゐる。"あの時"に。いや、それ以前にも。

ぐちゅり。

巫女の手が、腕が、俺の腹部の中に侵食した。不思議と痛みはない。この異常な状況を、当たり前の様に受け入れてゐる俺。

巫女は俺の臓器をぐちゅりぐちゅりとかき回し、そしてある一点でその手を止めるど、捜し物が見付かつた時の様な笑みを浮かべた。

ぐちゅり。

俺から取り出されたそれ まだ脈打つ心臓は、巫女の手に納められた。思つていたより小さな心臓だった。

俺の口内は鉄臭い血の味が充満していた。巫女は俺の心臓を満足気に眺めると、社に供えた。

『生と死は対になつてゐる。神の生の為に、貴様はその身を神に捧げねばならない。今までがそうであつた様に。前回は若過ぎた。今回は適切だろう』

巫女が妖艶に笑つた。

俺はその場に倒れ込んだ。そうだった。前世では6つか7つくらいの時に心臓を神に捧げた。それ以前はどうであつただらうか。今回は21。来世では。

俺はその場に崩れ落ちた。やはり不思議と恐怖感はない。神の生と引き換えながら、何と誇らしい事だらう。

ドクドクと体内から流れ出た血液が生暖かい。地べたに付けた頬を濡らす。

『来世も頼むぞ。貴様は神への貢物として生を受けたのだかい』

昔々、その昔。神社には巫女がひとり。黒い艶のある長い髪をひとつに結い、憂いを帯びた漆黒の瞳で参拝者の祈りに耳を傾ける。

ある日小さな少年が巫女に聞いた。

『あのお社には何が居るの?』

巫女は答えた。

『神様が居られる。長い長い時を、あのお社の中で過ごされて居る』

『何の神様?』

少年はまた問うた。大きな瞳をキラキラと輝かせ、好奇心いっぱいの顔を巫女に見せながら。

『生と死を司る神様じゃ。』の土地の生と死を、護つて居られる』少年には意味が解らなかつた様だ。小首を傾げ、不思議そうに巫女を見上げる。巫女はそんな少年の頭を撫で、にっこりと微笑んだ。『じきに解る。けれど、忘れてはならぬ。生と死は常に隣り合わせ。対になつておるのじや。だから…』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6955b/>

生と死と巫女と神

2010年10月9日11時20分発行